

「向一存在」なるもの

——ヘーゲル『論理学』における für の理解をめぐる——

● 神 山 伸 弘

1 はじめに

寺沢恒信は、ヘーゲル『論理学』初版（寺沢は「A版」と呼ぶ。）翻訳の「付論五 A・B両版における「向自存在」の章のちがい——本文が変化して注解が変化しないのはなぜか——」において、みづから「向一存在」と訳す小見出しの原語に言及し、「A版の『Aの二の(b)』は“Für eines seyn”であり、B版の『Aのb』は、“Sein-für-Eines”である。」として、その異同理由が不明としながら、この用語が「奇妙な用語」だと指摘する¹。そのうえで、その意味を解明して、次のように言う。「向自存在は他者を自己の外にもたない。他者は揚棄された他者として・契機として向自存在のうちに取りこまれており、もはやいかなる独立性をもっていない。このような向自存在の契機となっている・揚棄された他者に向かってある存在、それが『向一存在』なのである。」² 寺沢がここで示した理解の要点は、「揚棄された他者に向かってある存在」が「向一存在」だということであり、さらに核心を抉れば、「一」とは「揚棄された他者」だということである（圏点神山）。

この理解を支えるために、寺沢は、ヘーゲルが“b.) Für eines seyn”の項で与えた「注解」(Anmerkung)——ヘーゲルが目次で与えた題目では“Was für einer?”——での説明に依拠して、“Was für ein Ding ist es?”を「それは一つの物にとって何であるか?」（圏点神山）と訳し³、「一つの物」を「一」である「揚棄された他者」と読んだのではないと思われる。もっとも、寺沢は、直截にはこのように言明していないが、「揚棄された他者」を持ち出す理由としては、次の2点を挙げている。すなわち、第1に、「向自存在」は、「他在への関係である場合には、それはただ揚棄されたものとしての他在への関係でしかない」（圏点神山）こと、そして第2に、「他者は向自存在のうちにのみあり、向自存在の自己自身への無限の関係の外にある何かではなく、だからして他者は向一的にあるというこの定在だけをもっている」（圏点寺沢）ことである⁴。「揚棄されたものとしての他在」と「他者は向一的にある」とを繋げると、「揚棄された他者に向かってある存在」という「向一存在」が出来上がる。

そのうえで、寺沢は、「『向一存在』というカテゴリー」が「きわめてわかりにくい」と評価する。というのも、「『一』というカテゴリーが成立していないのに『向一存在』について述べ」、「このカテゴリーから逆に『一』を導き出そうとする」からだとされる⁵。

たしかに、「向一存在」なるものを構成するには「『一』というカテゴリー」が要求されるとみ

1 ヘーゲル『大論理学』（1812年、初版）1、寺沢恒信訳、以文社、1977年、558頁。

2 前掲箇所。別に、「向自存在のなかに揚棄されたものとして含まれている有限性の契機」だともされている。前掲書、560頁。

3 前掲書、558頁。

4 前掲書、559頁。

5 前掲箇所。

れば、論点先取の虚偽にヘーゲルが陥っているとみることもでき、それゆえに「向一存在」が「奇妙な用語」として「きわめてわかりにくい」とされるのにも首肯できそうなところがある。とはいえ、初版では、「向一存在」に引き続いて「C 観念性」、「三 一の成」（寺沢訳による）が論じられるから、ヘーゲルの議論は、「『一』というカテゴリー」を形成していくプロセスを具現していると思ふと見ることが可能であろう。

むしろ、「向一存在」が「奇妙な用語」であると考えられるのは、こうした論点先取のところにあるというよりは、初発のところ、すなわち、“Für eines seyn”ないしは“Sein-für-Eines”を「『向一存在』と訳すほかない⁶とする寺沢の原文理解によるのではないか。また、「向一存在」を「揚棄された他者に向かってある存在」と理解するところにあるのではないか。

というのも、“Was für einer?”の「註解」でヘーゲルが“Was für ein Ding etwas sey?”というドイツ語表現を「観念論的な表現」だとしていることに関し、寺沢は「注」をして、「『この観念論的な表現』とヘーゲルはいつているが、ここで問題にされている表現がなぜ観念論的であるといわれるのか、ということをはなはだわかりにくい⁷」としており、まずこの段階において「向一存在」が「奇妙な用語」だと認定されているのではないと思われるからである。

また、さらに、「向一存在」の意味の理解として、「揚棄された他者に向かってある存在」とすることが妥当であるか、という問題もできそうだからである。たとえば、見田石介は、「向一有」を、「同じ一つのものに向かってある側面」だとしたり、「向自有」が「対他関係および他のものそれ自体を、みんな自分のなかに溶かしこんでいる⁸」ことだとしたりしており、寺沢とはいささか違った理解を示している。もちろん見田の見解が妥当であるかどうかとも問題かもしれないが、いずれにせよ、「向一存在」なるものの意味を明確にする課題は未決のままである、といえるのではなからうか。

そこで、本論としては、おもにヘーゲルの『論理学』初版に依拠しながら、「向一存在」なるものの原語レベルでの正確な理解に回帰しつつ、その課題を達成したいと思う。

2 Was für einer? の意味

まず、手始めに、“Was für ein Ding etwas sey?”というドイツ語表現をヘーゲルが「観念論的な表現」だとしていることについて、寺沢が「なぜ観念論的であるといわれるのか」「はなはだわかりにくい」としていることを検討しよう。というのも、このような不明さにこそ、解釈をめぐる深刻な本質的問題が伏在しているように思われるからである。

寺沢は、その「注」において、くだんの表現を「これは一つの物にとって何ですか」（圏点神山。以下同様）と訳している⁹。もちろん、寺沢の指摘どおり、「ドイツ人が観念論的な考え方を日常的にしているからこのような表現がドイツ語に生じたというわけではない」ことは、あらためて言うまでもないことである。寺沢は、ヘーゲル自身が「註解」において与えた説明が「けっしてわかりやすいものではない」とし、「ヘーゲルの解釈そのものが相当に強引な・こじつけともみられる解釈である」と断ずる。このように酷評される代物であるが、寺沢は、この「ヘーゲルの解釈」も交え、くだんの表現をさらに「この人間 (A) は一人の人間 (X) にとって何であ

6 前掲書、558頁。

7 前掲書、393頁。

8 見田石介『ヘーゲル大論理学研究』第1巻、ヘーゲル論理学研究会編、大月書店、1979年、260頁以下。

9 寺沢訳、前掲書、393頁。以下、しばらく、この「注」について引用・参照する。

るか」という形式の問いと解釈する。そして、「『この人間 (A)』の一つの契機にすぎない存在が問われている」と理解し、「契機にすぎないものであるから、それは『観念的なもの』」であるとヘーゲルが主張しているのだという。「そしてこのような『一人の人間 (X) にとつての存在』 = 『この人間 (A) の契機になっている存在』を、このドイツ語の表現から作りだしたヘーゲル特有の術語で『向一存在』とよんでいるのである。」

こうした解釈が妥当であるかどうか吟味する前提として、“Was für einer?” なる表現の通常理解——したがって「哲学」においてもけっして踏み外せない意味理解——について、まずはともあれ確認しておきたい。

今日、“Was für einer?” は、「疑問代名詞」として分類され、さらに「疑問冠詞類」としても用いられるとされている。というのも、それは、「格変化体系が完全で、同形態の冠詞類と同様に格および数に応じて変化する」からである¹⁰。そして、その意味としては、たとえば、“Er hat ein Auto.” (彼は車を一台もっている。) という事態に対し、“Was für ein(e)s hat er?” と問えば、それは、日本語として「彼はどんなのももっているのですか?」という問いに、あるいは“Was für ein Auto hat er?” と問えば、それは、日本語として「彼はどんな車もっているのですか?」という問いになると説明されている¹¹。したがって、ヘーゲルの提示した例文である“Was für ein Ding etwas sey?” を、その伝で訳すなら、「どんな物ですか?」とするのが、文法に忠実な学生の平凡な解答であると思われる。ところが、ヘーゲル哲学の碩学にかかると——もちろん碩学も文法に忠実な訳ができ、それと示しているのではあるが¹²——、先に示したように、ヘーゲルの文の「直訳」としては、これが「それは一つの物にとつて何であるか?」¹³という訳文に化けてしまうのである。

先ほど、「解釈をめぐる深刻な本質的問題」としたのは、そうした文法に忠実な学生の解答と、

10 ヘルビヒ、ブッシュ『現代ドイツ文法 付録：ドイツ語の「新正書法」解説』在問進訳、三修社、2001年、276頁参照。

11 前掲書、278頁参照。

12 「それはどんな物ですか?」寺沢訳、前掲書、558頁。訳文本文では、「或るものはどんな物であるか」。前掲書、162頁。

13 前掲書、558頁。訳文本文では、「或るものは一つの物にとつて何であるか」との「逐語訳」を掲げる。前掲書、162頁。ヘーゲル『論理学』第2版でもこの「註解」は維持され——であるがゆえに寺沢はなにゆえこの「註解」が維持されるのかを問題にするのだが、それはさておき——、第2版における“Was für ein Ding etwas sei.”の邦訳も参照する必要があるであろう。武市訳は動揺している。すなわち、「その『もの』が一つの物に対して——比べて——何であるか、即ちそれは如何なる種類、性質のものであるか」(圏点神山)となる。ヘーゲル『大論理学』(改訳)上巻の1、武市建人訳、岩波書店、1956年、193頁参照。山口祐弘は、これを「或るものが一つのものに対して何であるか」(圏点神山)と訳す。ヘーゲル『論理学の学』第1巻「存在論」、山口祐弘訳、作品社、2012年、162頁参照。ヘーゲルは、この表現に基づく議論を好んだようである。これは、1831年の「論理学講義」でも言及されていて、“Was ist das für eines.”のかたちで議論する。牧野広義らは、これを、「それはどんな種類のものですか」と訳し、続いての表現“wir fragen da nach der Sache selbst, wofür sie ist, das ist sie selbst”を「私たちはここで事柄そのものに関して、事柄が事柄そのものに対して何であるかをたずねています。」とする(圏点神山)。Vgl. G. W. F. Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 10, Vorlesungen über die Logik, Berlin 1831, Nachgeschrieben von Karl Hegel, Hrsg. v. Udo Rameil, Hamburg 2001, S. 123. G.W.F. ヘーゲル『論理学講義 ベルリン大学1831年』、カール・ヘーゲル筆記、ウド・ラーマイル編、牧野広義・上田浩・伊藤信也訳、文理閣、2010年、136頁参照。

ヘーゲル哲学の碩学の解答との間に、著しい懸隔が認められるからである。それもそうであろう。「ある物」が問題となっていて、その「ある物」が「どんな」ものであるのか、という問いと、その「ある物」が「一つの物にとって何か」という問いとでは、まったく異質な関心があるからである。これらの差異は、ヘーゲル「研究」の言い方を借りれば、前者は、「性状」といった「向他存在」が問われているが、後者は、物の契機となる存在である「向一存在」が問われることになることとされるのだが¹⁴、おそらく、後者も、日本語の含意として、「向他存在」の理解を呼び覚ますことになるだろう。なぜなら、「にとって」という語は、どうしても、ここでいわれる「ある物」と「一つの物」とがたがいに「他」であることを含意せざるをえないからである¹⁵。よしんば、ヘーゲルの議論に即するつもりで、たがいに「他」であるそれぞれがじつは同一であって「一」であるとパラフレーズしたとしても、日本語の「にとって」という語は、こうした理解を絶望的に妨げることにならざるをえないのではないか。したがって、「向一存在」は、「向他存在」と違うと理解すべきなのに、そうした背景があるから、「向他存在」と同じ「他」性を持つものとどうしても理解されてしまう。だからこそ、寺沢は、すでに示したように、「向一存在」を「揚棄された他者に向かってある存在」だと理解する羽目に陥るのである。つまり、für を「向」と訳すならば、「一」は「他」であるほかはなくなるわけである。「向一存在」が「奇妙な用語」、いや少なくとも奇妙な訳語であるゆえんである。

「どんな物ですか？」と訳してみれば日本語として他愛のないことであるが、ドイツ語において“Was für einer?”という表現をとる趣旨がどのようなものなのかを、釈迦に説法であるが、再確認しておく必要がある。

ヘルビヒとブッシュャによれば、「疑問代名詞は、未知の要素を問い合わせるのに用いられる」のだが、「問い合わせの対象となる要素の種類」は、「疑問代名詞ごとに定まっている」¹⁶。wer は「人間」を、was は「事物」を、welcher と was für einer/was für welche は「人間・事物の属性」を「問い合わせの対象となる要素」としている。「ただし、welcher においては個別性の側面が強く念頭に置かれ、was für einer/was für welche においては質的側面の方がより強く念頭に置かれる」(圏点神山)とされる。ヘルビヒらの挙げる文例としては、“Welchen liest du jetzt?”(「君は今どれを読んでいるのですか。’)と問えば、たとえば、“Den zweiten Band.”(「2巻目です。’)と答えたりするのに対し、“Was für eines liest du jetzt?”(「君は今どんなのを読んでいるのですか。’)と問えば、たとえば、“Ein Fachbuch.”(「専門書です。’)と答えたりするのである。

なお、この点、煩瑣かもしれないが、別の解説も参照しておこう。ヴァインリヒによれば、「疑問冠詞 welcher は」、「詳細な指示を要求する」のに対し、「複合的な疑問形態素 was für と後方照応の冠詞」は、「指示の特殊性についての情報を入手するため」(圏点神山)に用いられる¹⁷。また、シュルツとグリースバハによれば、「疑問代名詞 welcher は」、「人または事物で既にわかっているグループの中の特定の人または事物を問う」のに対し、「was für ein?, was für eine? (単数), was für? (複数) は」、「すでにわかっている人または事物のグループの中の不定の人または事物を問う」、またその「詳しい叙述を問う」¹⁸ (圏点神山)とされている。ヴァインリヒがい

14 寺沢訳、前掲書、394頁参照。

15 「にとって」の意味については、註34を参照のこと。

16 G. ヘルビヒ&J. ブッシュャ『新・ドイツ語ハンドブック』在間進・洞沢伸訳、第三書房、1993年、110頁。以下、本段落では、同箇所を参照。

17 ハラルト・ヴァインリヒ『テキストからみたドイツ語文法』脇坂豊編ほか訳、三修社、2003年、885頁。

う「詳細な指示」と「指示の特殊性」とは、またシュルツらがいう「特定」と「不定」とは、ヘルビヒらがいう「個性」と「質」とに相応するであろう。

これらをまとめて端的に言えば、“Was für einer?”という問いは、当該既知のもの「質」を、特殊性として、個物を特定しない不定なかたちで問うているのである。

この表現での für は、was と一体のものとして扱われ、「前置詞ではない」とされるから¹⁹、寺沢が「にとつて」とするようには、「逐語訳」といえどもその語をそれ自身このように訳する必要はない。とはいえ、それは、格支配の機能はともかく、意味的になんらかの働きはしているだろうから、その働き自身は、明確にしておいたほうがよいだろう。

相良守峯によると、「was für [ein]」といふ疑問代名詞に用ひられる für は、『同一視』即ち『として』の意味の「系統」に属する²⁰。たとえば、“Er gibt sich für einen Gelehrten aus.”（「自ら学者と称する」）という文例の“für”には、「同一視」の意味があるが、“was für [ein]”での“für”も同様だとするのである。

また、井原恵治・浜川祥枝によると、「日常の用語では **Was lesen Sie für ein Buch?** のように was とつぎの für をひき離して使うことがある。これが本来のかたちで、für は接続詞 als (…として) とおなじ意味になる」。そして、このさい、「前置詞 für が同等・代理」を表すことになる²¹。

なぜ für を差し挟むことになるのかについては、ブリンクマンの説明がわかりやすい。「Was は、所与の事情で概念を明確にする (spezifizieren) ために用いることもできる。このさい、ある種類を代表するもの (Repräsentant) を問うことになるので、代理 (Stellvertretung) のための関係語である für が、was と名詞表現の概念とのあいだの結合を確立する」のである。「was für ein は、ある種類の具体的な代表を問うのに対し、これと競合するかにみえる *welch* は、特定の代表を問い合わせるのである。」²²

これらにしたがって、あえて für がもつ「同一視」、「同等・代理」の意味を顕在化させようとするなら、ヘーゲルの文例、すなわち、愚直には「どんな物ですか?」と訳すべき“Was für ein Ding etwas sey?”は、せいぜいが、「これは物としてなんですか?」と訳すべきものなのだろう。すると、おそらく、この訳は、寺沢訳の「これは一つの物にとつて何ですか」の向こうを張るものにならざるをえないのではないか。というのも、すでに示したように、für を「にとつて」とする寺沢訳は、「これ」と「一つの物」とがたがいに「他」であること、すなわち区別を前面に押し出すのに対し、それを「として」とする訳は、これらを「同一視」する、あるいは「同等・代理」とする意味を明示するからである。

ヘーゲルが註解で議論する“Was für einer?”を解釈する語学上の準備は以上で整ったと思うが、なお、für それ自身についても深めておく必要がある。けだし、ヘーゲルの議論では、was

18 シュルツ／グリースバハ『ドイツ文法』稲木勝彦ほか訳、三修社、1982年、190頁以下。

19 三好助三郎『新独英比較文法』、郁文堂、1977年、162頁。前置詞といえないのは、「次の名詞の格を規定することはない」からである。

20 相良守峯『ドイツ語学概論』、研究社、1950年、318頁以下。三好は、“Was für ein”の“für”について、「本来 für は als (…として) の意味」であるとする。三好、前掲書、163頁参照。

21 井原恵治・浜川祥枝『ドイツ語学文庫8 前置詞・接続詞』、白水社、1958年、82頁。

22 Hennig Brinkmann, *Die deutsche Sprache, Gestalt und Leistung*, 2., neubearbeitete und erweiterte Auflage, Düsseldorf 1971, S. 748 f.

を用いないのが通例だからである。

3 für の意味

「向一存在」は、Für eines seyn または Sein-für-Eines の訳であって、とくに、「向」は、そのうちの für の訳となっている。その「向」の意味は、寺沢の“Was für einer?” 理解にしたがえば、「にとつて」ということになりそうだが、すでに示したように、寺沢は、そもそも「向一存在」を「揚棄された他者に向かっている存在」と理解するわけだから、なにゆえかはともかく、「にとつて」と「向かって」とがたがいに置きかえうるものとみなしているのであろう。

ともあれ、日本語としての妥当性は、当然ながらドイツ語の理解に従属するので、まずは、für の意味を整理しておこう。

ブリックマンによれば、für を用いるさい、「選択の自由」が一役演じるという²³。人や事柄に味方するかいなかを、für か gegen で表現する。また、他人の代理をするときは、積極的には für、消極的には statt で表現する。ある規定を表現するときに、für でも与格でも表現できるが (Das habe ich mir gespart – Das habe ich für mich gespart.)、für を用いるときには、「みずからの活動の目標が自由に設定されている」ことを表現するという。für には、「比較する判断」が結びついていて、このさいの判断は「自由」なのである。事物の領域では、für によって相互性や交換、代償を表現するが、これは、人間関係にも使われるという。

ブリックマンは、この「選択の自由」によってこそ、“Was für ein Mensch!” という表現を説明することができるとする。「すでにそれ自体 ein で示したくある立場の選択」が、für を使用することで強調される。名詞で呼ばれた類から個物が取り出され、しかも、質の観点でそれがなされるのである。これは、für で行った選択と判断が結びつくことができるから可能なのである。²⁴

我々が明確にしたい Für eines seyn については、ブリックマンが、「味方をする」(Parteinahme) für の例として “für etwas sein” を挙げていることに注目する必要があるだろう。この伝でいけば、Für eines seyn は、「一つのものに味方する存在」となるのか。

ヴァインリヒによれば、前置詞 für は前置詞 vor から分かれたのだが、vor が「その意味くまえ」をもってむしろ空間的、時間的な文脈に現れるのに対し、für は、「視線を交わすことを前提とする特殊なコミュニケーションの振る舞いを表わす」²⁵とする。このさい、ヴァインリヒの書の訳者のあてる für の訳語は、「のために」となる。そのうえで、「前置詞 für の意味を意味特徴〈交換〉で記述することにする」とし、「この意味は基本的な人間学的な身振りを表明するが、コミュニケーションのカップルの相互作用をやり取りの交易として解釈する (記号交換、価値交換、商品交換)」とする。たとえば、“ein Leben für die Musik” (「音楽のための」「ある人生」) という表現では、“Musik” という「付加部」に“Leben” という「基礎部」が「交換」のかたちで「提供されている」のである。

このさい、「相互作用の基本形式としてのコミュニケーションのカップル間の交易における提供」というのは、人が自分自身を提供すること、すなわち自分を他の人に自由に使わせる可能性を含むという、プロトタイプ的な方向づけのことである (圏点神山、以下同様) としている。そして、この派生として、(1) この「交換のひとつの基本的社会形式には他の者の代理をする場

23 A. a. O., S. 185. 本段落では、これ以下を参照する。

24 A. a. O., S. 187.

25 ヴァインリヒ、前掲訳書、674頁。本段落以下の議論は、この箇所を巡る。

合)がある。(2)「記号交換全体も代理の原則に基づいて」おり、「記号として明確なもの(シンボル、印紙または通貨として有意のもの)が、ある与えられた状況では等価値と見なされる他のもの(事物、財産、商品として有意のもの)を保証する」、(3)「すべての交易の基礎である品物の等価性は、見積もりと評価を受けて決められる」ので、その「評価を提示する多くの動詞は für-付加部と結びついている」とされる。

Für eines seyn または Sein-für-Eines をヴァインリヒの整理にしたがって解釈すれば、これは、根本において、Sein(存在)がEines(一)に「提供されている」事態を表現する。すなわち、「一のための存在」である。これを、(1)「代理」として理解しても、(2)「交換」として理解しても、日本語では「一の代わりの存在」となる。(3)「評価」として理解すれば、「一に値する存在」となるか。

ヘーゲルは、Für eines seyn または Sein-für-Eines の理解を助けるために、“Was für einer?” という問いの構造を注解するわけだから、この両者の意味は、基本的に同一でなければならない。für には、ブリンクマンのいう「味方をする」(Parteinahme)、ヴァインリヒのいう「提供されている」事態が根底にあり、“Was für einer?” の“für”には、「同一視」、「同等・代理」の意味があるとすれば、Für eines seyn または Sein-für-Eines は、「〈一つのもの〉と一心同体である」ということになるだろう。こうした意味を日本語の「向」が表現しえているかどうかは、のちに議論する。すくなくとも、このさいの für に関するドイツ語の釈義に基づく和訳としては、『独和大辞典』(第2版、小学館、2000年)で示すもののうち『《同定判断・通用・妥当》(als) …と〔して〕、…であると〔して〕²⁶を採用しなければならないであろう²⁷。すなわち、Für eines seyn または Sein-für-Eines は、「〈一つのもの〉として存在する」または「〈一つのもの〉としての存在」と訳すべきなのである。

4 「注解」対訳

以上の検討に基づいて、さしても長くないので、まずは、“Was für einer?” と目次で示されるヘーゲルの「注解」を、原文も示しつつ訳出し、これを寺沢訳²⁸と対比してみよう。まず原文を掲げ、左欄に本論考訳を、右欄に寺沢訳を示すことにする。原文の行左端に示す数字は、ヘーゲルの『論理学』(初版)の頁数と行数をコロンでつなげたものである。ゲシュペルトはイタリックにしている。文番号を○囲み数字にして【隅付括弧】で囲んで示す。

26 『広辞苑』第6版によれば、「として」は、「助詞」であり、①「…とあって。」、②「…の資格で。」、③「…の状態で。」、④「…のままにしておいて。…はさておき。」、⑤「(打消を伴って)例外なくすべて。」、⑥「…で」ということになる。『大辞泉』第2版によれば、「として」は、「格助詞または断定の助動詞「たり」の連用形「と」に、サ変動詞「す」の連用形「し」、接続助詞「て」の連語であり、意味としては、①「…の資格で。…の立場で。」、②「それまでの話の内容をひとまず保留して、別の話題に移る意を表す。」、③「(下に打消しの語を伴って)例外なく全部である意を表す。」、④「…で。」ということになる。同定判断は、『広辞苑』②(用例「人として恥かしくない行為」)、『大辞泉』①(用例「公人として発言する」)に相当するだろう。

27 グリムの辞書 (*Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*. 16 Bde. in 32 Teilbänden. Leipzig 1854-1961. Quellenverzeichnis Leipzig 1971. 以下 *Grimm* と略す。なお、<http://woerterbuchnetz.de/DWB/> のサイトを利用した。2015年2月16日現在。)によれば、“für” がもつ “als, wie” (FÜR I. A. 4. b.) としての「同等」の意味は、“a) die stelle einnehmend” (位置を占める) (“α) an der stelle” (～に代えて、～に代わって)、“β) stellvertretend” (代理) が双方向になることからくる。Vgl. *Grimm.*, Bd. 4, Sp. 625.

28 寺沢、前掲訳書、162頁。

本論考訳	寺沢訳
<p>【①】 94 : 19 Der zunächst als sonderbar erscheinende Ausdruck 94 : 20 unserer Sprache für die Frage nach der Qualität, <i>was</i> 94 : 21 <i>für ein</i> Ding etwas sey, hebt das hier betrachtete 94 : 22 Moment vornemlich heraus.</p>	
<p>《<u>いったいどんな物</u>なんですか》といった質への問いとして、我々の話し方ではさしあたり奇妙なかたちで現れる表現が、ここで考察されたモメントをとりわけ際立たせてくれる。</p>	<p>質を問うために用いられるわれわれの言語〔ドイツ語〕の・はじめには奇妙に思われる表現、すなわち、<u>或るものはどんな物であるか</u>〔逐語訳、或るものは一つの物にとって何であるか〕という表現は、ここで考察されている契機をとりわけきわだたせている。</p>
<p>【②】 94 : 22 Die Bestimmtheit ist darin 94 : 23 ausgedrückt, nicht als ein an-sich-seyendes, sondern als 94 : 24 ein solches, das nur <i>für eines</i> ist.</p>	
<p>この表現では、規定態は、それ自体で存在するものだと表現されておらず、むしろ、ただ一つのものとして（「いったい」）存在するものだと表現されている。</p>	<p>この表現では規定態が即自的に存在するものとしてではなく、ただ向一的にのみ存在するようなものとして表現されている。</p>
<p>【③】 94 : 24 Dieser idealisti- 94 : 25 sche Ausdruck fragt dabey nicht, was dis Ding A <i>für</i> 94 : 26 <i>ein anderes</i> Ding B sey, nicht was dieser Mensch 94 : 27 für einen andern Menschen sey ; — sondern was ist <i>diß</i> 94 : 28 <i>für ein Ding, für ein Mensch?</i> so daß <i>diß</i> Seyn 94 : 29 für eines zugleich zurückgenommen ist in <i>diß</i> Ding, in 94 : 30 diesen Menschen selbst, oder daß dasjenige, <i>welches</i> 94 : 31 <i>ist</i>, und das <i>für welches</i> es ist, ein und dasselbe 94 : 32 ist, — eine Identität, welche itzt an der Idealität be- 94 : 33 trachtet werden wird.</p>	
<p>この場合、観念論的なこうした表現は、《この物Aは、ある別の他の物Bとしてどんなものですか》と問うているわけではないし、《この人間は、別の他の人間としてどんなひとですか》と問うているわけでもない。——そうではなく、《これは、物としてどうなんですか、人間としてどうなんですか》と問うているのである。だから、一つのものとしてのこうした存在は、同時に、この物自身に引き取られてしまっているし、この人間自身に引き取られてしまっている。いいかえれば、《なにかが存在している》ということと《なにかとして存在している》とは、一つと同じことなのである。——これが、こんど、観念態のもとで考察される同一態である。</p>	<p>この観念論的な表現は、その際に、この物Aは一つの他の物Bにとって何であるかとか、この人間は他の一人の人間にとって何であるかではなくて、——これは一つの物にとって、〔または〕一人の人間にとって何であるか、と問うのであり、その結果、一つのものにとってのこの存在がただちにこの物自身のなかへ・この人間自身のなかへと取りもどされている、換言すれば、存在している当のものと、その当のものがそれにとってあるそのそれとが、同一なのである。——この同一性はいまや観念性のところで考察されるであろう。</p>

“was für ein Ding etwas sey”が「質への問い」であるとするヘーゲルの認識がドイツ語学的にも追認されることは、すでに我々が裏付けたところである。けっして、寺沢の言うような「こじつけ」などではないのである。ヘーゲルの議論の焦点は第2文目にあり、この問いが、答えとして“an-sich-seyendes”（「それ自体で存在するもの」）を求めているのではなく、“für eines ist”（「一つのものとして存在するもの」）を求めているということにある²⁹。つまり、「質への問い」が、いわば物自体への問いではなく、「一つのもの」への問いとなっている、ということである。このさい、この問いは、本論考第2節で示したように、既知の人または事物（個別的なもの）を念頭に置いて、個物を特定しない不定なかたちでその特殊態を問うものであるから、答えそのものは、特殊態のかたちをとることになるとしても、問いと答えの全体をとらえれば、そこでは個別的なものの特異態との統一が果たされていることになる。だから、ヘーゲルは、第3文において、「一つのものとしてのこうした存在」、すなわち特殊態は、「同時に、個別的なものである「この物自身」、「この人間自身」に引き取られてしまっている。」というのである。

ヘーゲルの『論理学』初版における Fürsichsey 理解によれば、これは、Ansichsey のモメント（93：01）と³⁰、Für eines sey のモメント（93：30）と、この両者を一体にしたものである Idealität のモメント（95：01）からなっている。Fürsichsey への移行については、「存在」論第2章の Daseyn の議論末尾でなされており、「質的な無限態」、「みずからへの否定的な関係である〈みずから自身と同等な存在〉」が Fürsichsey だとされていた（87：17 f.）。Ansichsey としての Fürsichsey は、こうした無限態である。すなわち、「みずから自身への無限な関係というモメント」（92：04 f.）であり、「Fürsichsey は、〈他であること〉（Anderssey）の否定であるから、みずからへの関係である。すなわち、みずからと同等であることである。このことが、a.) Fürsichsey がもつ Ansichsey のモメントをなしている」（92：23 f.）とされる。

こうした無限態は、「真なる無限態」（86：33-87：01）であり、ここでは、「有限態も、劣悪な無限態も廃棄されている」（87：01 f.）。こうした「廃棄」によって、かえって、「有限なもの」と無限なものとは「統一」（Einheit）されている（86：04 f.）。ところが、「無限態」というばかりでは、「真なる無限態」であるのか「劣悪な無限態」であるのか、判然としない。しかも、たんに評価語としての「真なる」で修飾しさえすれば、「真なる無限態」が了解されるものでもない。「真なる無限態」に至りつく Daseyn の議論プロセスでは、「真なる無限態」と「劣悪な無限態」との差異がそれなりに明確になったであろう。しかし、Fürsichsey として「真なる無限態」をそれだけで扱うとき、有限と無限を廃棄しながら統一する側面は、「無限態」をいうばかりでは解明できない。だから、ヘーゲルは、この「統一」を「モメント」として認め、「一つのもの」（eines）「として」（für）「存在する」（sey）と概念的に位置づけたのではないかと思われる

29 寺沢は、この“für eines ist”を素通りして、「ドイツ語に特有の“Was für ein Ding ist es?”という形式の疑問文」から“Für eines sein”の「語への転化」を説く。すなわち、「前記の文から語をつくるために、最初の“was”と最後の“es”を取り去り、“ein Ding”と“ist”とを一般化して“eines”と“sein”とに変えれば、“Für eines sein”になる。」とする。寺沢訳、前掲書、558頁参照。本論考前節でプリンクマンの指摘を紹介したように、このようなアクロバットをせずとも、“Für eines sein”は、「日常語」として通用する表現である。

30 寺沢は、「『向自存在の契機』といいながら、その一方が『向自存在』自身であるというところに、形のととのわないものがある。」と指摘する。寺沢訳、前掲書、557頁参照。たしかに、ヘーゲルは、Fürsichsey の契機を列挙するさいに、この Ansichsey をたんに Fürsichsey としている箇所がある。たとえば、「〈一つとしての存在〉と〈それだけで独立した存在 Fürsichsey〉とは、たがいに真なる規定態をなしていない」（98：08 ff.）。しかし、このさい、Fürsichsey は、「その Ansichsey」と読まれるべきなのだろう。

る。もちろん、このような概念を導入することによって、Daseynの議論に後戻りするのではない。FürsichseynがEinesであることが確証されなければならない、ということである。だから、ヘーゲルの『論理学』初版においては、引き続き“Werdendes Eins.”の議論プロセスが求められることになる。

いずれにせよ、“was für ein Ding etwas sey”の問いは、FürsichseynのAnsichseynではなく——つまり「無限態」で満足してそこで停滞するのではなく——、その「真なる無限態」を示す、有限と無限を廃棄しながら統一する側面を、「一つのものとして」明確にする働きがある、という点で、ヘーゲルは重視したのである。（『一』というカテゴリーが成立していない』との寺沢の判断は、この点でヘーゲルの論脈を踏み外している。）

そして、この問いにおけるfürが「同一視」、「同等・代理」として考えられているからこそ、第3文でいわれるように、“welches ist”と“für welches es ist”とは、「一つの同じこと」なのである。というのも、「同一視」、「同等・代理」の意味では、“A für B”は“A=B”であって、「Aであること」は「Bであること」と同じだからである。直接に「Aであること」を問うことがそのAnsichseynを問うことだとすれば、「BとしてのA」を問うことは、「B以外のあり方が否定されたA」、「BにほかならないA」を明確にすることである。BがEinesであれば、「Eines以外のあり方が否定されたA」、「EinesにほかならないA」を明確にするわけである。

5 〈一つのもの〉としての存在

“Was für einer?”とfürのドイツ語の意味を明確にするなかで、前節において“für eines seyn”あるいは“Seyn für eines”を「一つのものとしての存在」と訳すことにより、ヘーゲルの“Was für einer?”の「註解」がきわめて単純明快になったのではなかろうか。

通例、für eines seynあるいはSeyn für einesは、Seyn für Anderesが「向他存在」「向他有」と訳されるのに倣って、「向一存在」「向一有」と訳されている。しかし、「向一存在」ということで、「一つのものとしての存在」という意味が思い浮かぶだろうか。むしろ、「一」に「向」かう³¹「存在」と読み下して、そのまま理解するのではなかろうか。「はじめに」で示したように寺沢自身はそう読んでいるし、ほかにたとえば、武市健人は、「向一有は『向一者一有』として、『一者に向かつて』の意味をもち、一者に一者であることを自覚させるものである³²として

31 『日本国語大辞典』（第二版）によれば、「むかう（向・対）」には、自動詞と他動詞のそれぞれの用法があるが、我々の当面しているのは自動詞であろうから、ここにその意味を摘記する。すなわち、「むかう」は、そもそも「むきあう（向合）の変化した語」であり、「①他の正面に対して自分の正面を向ける。相對する。」「②互いに相手を前にする。対座する。」「③その方向に面を向けて進む。おもむく。出むく。」「④時が近づく。その時になろうとする。また、時が移ってその状態になろうとする。」「⑤二つのもが肩をならべる。相当する。匹敵する。」「⑥はむかう。逆らう。はりあう。対峙する。」また、同書によると、「向」は、「コウ・キョウ」と読み、「その方向や方面にむかう。そのほうに正面からむかう。面している。」という意味になる。『大漢和辞典』によると、「向」は、「むかふ。むく。」の意味では、「④前にむく。前にすすむ。」「②対する。むきあふ。」「⑥ゆく。さる。」「③したふ。心をむける。」

このような意味で捉えるとき、「むかうもの」と「むかう方面」の二つが別のものとして離れてあり、「むかうもの」は「むかう方面」にみずからの正面を向けていることになる。ただし、『日本国語大辞典』の⑤の意味は、これとはやや異質で、いわば「同等」の意味に近接するだろうが、今日この意味は廃れていると思われる。

32 武市健人の訳註の議論。ヘーゲル『改訳 大論理学』上巻の一（ヘーゲル全集6a）、武市健人訳、1956年、岩波書店、247頁。

いる。しかし、こうなると、「一」は——みずから自身であるとしても——「向」きあう「存在」と離れざるをえないから、その「一」はどこにあるのか、という疑問が生ぜざるをえないだろう。このように離れた「一」は、「向一存在」の次項「一の成」（寺沢訳による）を経て、B節「一」で主題的に登場することになる。だから、「向一存在」で「存在」と離れた「一」は、のちに議論されるものとしてあるいじょう、「はじめに」で紹介したように「きわめてわかりにくい」と断罪されることになる。

これは、「向」を「対」³³と代えてみても、また先ほどの「註解」の寺沢訳にある「にとつて」³⁴と代えてみても、「一」と「存在」が離れる事情はさして変わるところがない。

しかし、訳語としては「向一有」を選ぶ武市健人にして、すでに、für を「として」の意味で理解していたのである。すなわち、先の引用に続いて、「それ自身『一者として』あるものという意味をもつ」（圏点神山）。あるいは、「向一有は、或物に於ける向他有と異なつて、少くもまず差し当つては、他物に対する面よりは、『それ自身として』、即ち『一者として』（für-Eines）の面が主である。他物との区別の面よりも、他物との同一の面、というよりもむしろ自己同一の面が主である」³⁵（圏点神山）。

では、逆順になったが、“Was für einer?” の註解が附される「〈一つのもの〉としての存在」の項の訳を試みよう。書式は、先ほどの註解で行ったのと同様であるが、【隅付括弧】内の数字は、段落番号と、○囲みの文番号である。

本論考訳	寺沢訳
93 : 30 b.) Für eines seyn.	
b.) 〈一つのもの〉としての存在	(b) 向一存在
【1①】 93 : 31 Die unendliche Beziehung des Fürsichseyns auf sich 93 : 32 besteht in der Gleichheit der Negation mit sich selbst.	

33 『日本国語大辞典』によれば、「対する」には、①「他のものに向かって位置する。互いに向かいあう。また、ある対象に向かう。」、②「応じる。こたえる。」、③「敵として相手に向かう。相手になって争う。抵抗する。」、④「対（つい）になる。並ぶ。」、⑤「あれとこれとを比べ見る。対比する。対照する。」の意味がある。『大漢和辞典』によると、「對」には、「㊟こたへる。」「㊟あたる。」「㊟むかふ。」「㊟あふ。たぐふ。」「㊟あはせる。たぐへる。」「㊟あひ。あひて。」「㊟つゐ。そろひ。」「㊟ひとしい。」「㊟とげる。盛んになる。」「㊟あげる。」「㊟をさめる。」「㊟上書の一体。」、「㊟姓、㊟現代」として「㊟つきあはせる。㊟しらべる。㊟まぜる。わる。㊟とちる。㊟定める。立てる。㊟正しい。㊟気があふ。むつまじい。」の意味がある。このうち、「㊟ひとしい。」の意味で「対」を今日読む者はいないであろう。もちろん、そのつもりで訳語にこの漢字をあてたわけではあるまい。

34 『大辞泉』第2版によれば、「にとつて」は、「格助詞「に」+動詞「と（取）る」の連用形の音便形「とつ」+接続助詞「て」の連語であつて、「判断や評価の基準となるものを表す」とされ、言い換えとしては、「…として。…からみて。」ということになる。この用例としては、「この額は学生にとつて大金だ。」『広辞苑』第6版によれば、「とる【取る…】」の項で、その㊟「関係する。①（主に「…に一・り（つ）て」の形で）…に関して。…の見地からは。」用例としては、「私にとつては叔父に当る。」など。

35 武市健人『ヘーゲル論理学の世界』上巻、1947年、福村書店、444頁。ほかに für を「向かつて」と理解するものとしては、姜尚暉『ヘーゲル大論理学精解』上巻、1984年、ミネルヴァ書房、302頁。「向一有（Sein-für-Eines）。他方の向自有の否定的止揚によって、ただ自分自身へのみ向かつて存する有。」（圏点神山）

<p>〈それだけで独立した存在〉がみずから無限に関係することの実質は、みずから自身と否定とが同等であることにある。</p>	<p>向自存在の自己への無限の關係は否定の自己自身との相等性をその本質としている。</p>
<p>【1②】 94：01 Das Andersseyn ist aber nicht verschwunden, so daß das 94：02 Fürsichseyn nur die unmittelbare Beziehung des Seyns 94：03 auf sich wäre, sondern es ist ein aufgehobenes.</p>	
<p>しかし、〈それだけで独立した存在〉は存在がみずから直接的に関係することにすぎないかのようになったため、〈他であること〉が消失したわけではない。むしろ、〈他であること〉は、廃棄されたものなのである。</p>	<p>だが他在が消失してしまっていて、その結果向自存在は存在の自己への直接的關係であるというのではなくて、他在は揚棄された他在である。</p>
<p>【1③】 94：03 Das 94：04 Andersseyn ist nicht zwischen dem Fürsichseyn und einem 94：05 Andern vertheilt; das Fürsichseyn hat nicht das Nicht- 94：06 seyn <i>an ihm</i> als Grenze oder Bestimmtheit, und da- 94：07 mit auch nicht als ein von ihm anderes Daseyn.</p>	
<p>〈他であること〉は、〈それだけで独立した存在〉と〈他のもの〉とのあいだに分かたれているわけではない。〈それだけで独立した存在〉は、限界や規定態である〈あらざること（非存在）〉をほかならぬみずからのもとに具えていないし、だからまた、みずからとは別の現存在である〈あらざること（非存在）〉をほかならぬみずからのもとに具えるのでもない。</p>	<p>他在は向自存在と他者とのあいだにふり分けられているのではない。向自存在は非存在を限界または規定態としてそれのもとに〔顕在的に〕もってはならず、またそれとともに、向自存在とは別の定在としてももっていない。</p>
<p>【1④】 94：07 Das 94：08 Andre ist daher überhaupt kein Daseyn, kein Etwas; es 94：09 ist nur im Fürsichseyn, ist nichts ausser der unendlichen 94：10 Beziehung desselben auf sich selbst, und hat damit nur 94：11 diß Daseyn, <i>für eines</i> zu seyn.</p>	
<p>ここから、この〈他のもの〉は、一般にいう、現存在でもなければ、〈なにものか〉でもない。〈他のもの〉は、〈それだけで独立した存在〉の内になしなく、〈それだけで独立した存在〉がみずから自身と無限に関係することの外にはなにもない。これにより、この〈他のもの〉は、もっぱら、〈一つのもの〉として存在するという現存在だけを持つのである。</p>	<p>したがって他者は一般に定在ではなく・或るものではない。他者は向自存在のうちのみあり、向自存在の自己自身への無限の關係の外にある何かではなく、だからして他者は向一的にあるというこの定在だけをもっている。</p>
<p>【2①】 94：12 Diß zweyte Moment des Fürsichseyns, drückt es 94：13 aus, wie das Endliche in seiner Einheit mit dem Unend-</p>	

94 : 14 lichen ist.	
〈一つのもの〉として存在することは、〈それだけで独立した存在〉がもつこの第二のモメントであるが、有限なものが無限なものともみずから統一するさいのあり方を表現する。	向自存在のこの第二の契機は、有限なものが無限なものとのその統一においてどのようにあるか、ということ表現している。
【2②】	
94 : 14 Auch das Seyn-für-Anderes im Daseyn 94 : 15 oder das Daseyn überhaupt hat diese Seite für eines zu 94 : 16 seyn ; aber ausserdem ist es auch an sich, gleichgültig 94 : 17 gegen diese seine Grenze.	
現存在における〈他のものとしての存在〉も、あるいは一般に現存在も、〈一つのもの〉として存在する側面を持つ。しかし、そのほかに、現存在における〈他のものとしての存在〉も、あるいは一般に現存在も、それ自体では、〈一つのもの〉として存在する側面というみずからの限界に無関心である。	定在における向他存在または定在一般もまた向一的にあるというこの側面をもっている。しかしそのほかに定在一般は即自的でもあり、この自己の限界に対して無関心的でもある。

以上の本論考訳には、とりわけ訳語をめぐるいくつかの註釈が必要であろうから、それも交えながら、寺沢訳との大きな差異にも言及していく。

【1①】

Fürsichseyn を「向自存在」「向自有」「対自存在」などといった原語置き換え訳にすべきではない、というのは、専門的にもすでにかなり定着した考え方になってきていると思うが、しかしそれでも、『論理学』的に慣用の「術語」として維持したい、との慕情も根強いのではないかと思われる。しかし、こうした für になんら日本語的な「向」「対」の意味が込められないことが判明した現在にあっては、もはや従来の定訳を踏襲する必要はないだろう。いや、むしろそれは害悪だとすべきだろう。

Fürsichseyn は、ヘーゲル『論理学』のある解説においても、「『それだけであるということ』、『単独であるということ』という意味」³⁶だとされていて、そもそも、「なにか深遠で神秘的なこと」を思わせる「向自有」と訳すべきではなく、それは「ドイツ語の直訳」としても失格なのである。

この点、グリムの辞書に基づき、明確にしておく。ここで、“FÜR”の項目のうち“für sich”の用例が中心のとりあげられるのは、「I. 前置詞」「A. 運動を表現し対格を要求するもの」のうち「4) ほかのさまざまな関係に関するもの」に属する“i) mit ausschlusz alles andern zukom-

36 鱒坂真・有尾善繁・鈴木茂編『ヘーゲル論理学入門』、1978年、有斐閣新書、36頁。この部分は、鱒坂真担当。鱒坂は、「向自有」の訳が「なにか深遠で神秘的なこと」を思わせるとしつつも「ドイツ語の直訳」として正当だと判断していると思われる。ヘーゲルの「非合理」を懸命に批判する鱒坂が、「神秘的」に響く「向自有」の訳を積義に背いて維持するのは、その「神秘的なこと」をそのまま保存しようとする意図を持ってのことか？ なお、山口祐弘は、Fürsichseyn を「対自存在（自己に対してあること）」と訳す。山口訳、前掲書、158頁参照。山口は、「原語 für sich は、『他から離れて』、『一人で』、『それだけで』、『独自に』という意味に用いられることもあるが、文脈に応じて訳し分ける」とする。前掲書、438頁参照。

mend oder gehörend an, sich beschränkend auf”（排他的帰属・所属、制限）の件である³⁷。ここでは、「人称代名詞の対格を伴う für は、ほかのだれをも排除してこの人称代名詞で表現されたものに断固として制限されていることを表している」としている。あるいは、「独自の人格にまったく制限し、他の人格からこの人格を隔離する」としている。また、シラーの用例に基づいて、「我々が von selbst とも言うような、独自の動機から (aus eigenem antriebe)、自発的に (aus freien stücken)」という意味もあるとする。

なお、本文での mit sich selbst の再帰は、Fürsichseyn の再帰であるから、そのように分かるよう語順を選んで訳す。91：14 ff. で、「〈それだけで独立した存在〉は、みずからをみずからに関係づける否定的なものであり、絶対的な規定されているものである。」とされていた。寺沢のように sich を「自己」と訳すのは、「自己」が再帰ではなく「私」に類する意味のみならず哲学用語として認知されている現状からしても³⁸、罪深い。

【1②】

so daß 文が接続法二式で記されていることに留意する。この部分は「反実仮想」であるから、「〈それだけで独立した存在〉は存在がみずからに直接的に関係することにすぎない」ことが否定されている。ようするに、「存在」以外の、端的には「非存在」が関係するという含意がある。これは、いずれ展開される³⁹。

「〈他であること〉が消失したわけではない。」というのは、事実である。寺沢は、この部分を「他在が消失してしまっていて」と訳すが、これは誤訳以外のなにものでもないだろう。けだし、事実が反転しているからである。

「〈他であること〉が消失したわけではない。」のは、「〈他であること〉が「廃棄されたもの」として消失していないからである。92：12 ff. で、「それだけで独立しているものがあるのは、〈他であること〉を廃棄することによって、そして〈他のもの〉との関係や共同態を廃棄することによってである。」とされている。したがって、「〈他であること〉を廃棄すること」が成り立つためには、〈他であること〉は消失しないのである。

【1③】

〈他であること〉が消失しないのであれば、〈他であること〉の居場所が問題であろう。

ここでは、まず、〈それだけで独立した存在〉と〈他のもの〉とがたがいに外在的に〈他であること〉といった関係を持つわけでないことを指摘する。〈それだけで独立した存在〉では、〈他であること〉と〈みずからの内にあること〉は、同一である。それは、91：12 ff. で、「〈みずからの内にあること〉である否定的なもの、限界である否定的なもの、つまり〈他であること〉である否定的なものが、同一なものだと設定されている。」とされるがごとし。

〈それだけで独立した存在〉に移行するにあたって、「現存在がもっていた規定態は、〈他のもの〉との関係としては消失してしまった。」(87：12 f.) のだから、非存在とはいっても、「限界や規定態」、「別の現存在」として具えることがないわけである。

37 Vgl. Grimm., Bd. 4, Sp. 636 ff. ここでは、“e) in beziehung auf, in hinsicht auf, in absicht auf”（関係、観点、意図）を参照するように求めている。

38 『広辞苑』第6版では、「自己」として、「われ。おのれ。自分。その人自身。」の意味を挙げる。『大辞泉』第2版では、①「おのれ。自分。自身。」、②「哲学で、同一性を保持して存在するあるものそれ自身。人格的存在以外にも用いられる。」とされるに至っている。

39 この件は、「空虚 das Leere」という「非存在」として露呈する (102：17 f.)。

なお、“an ihm”を「ほかならぬみずからのもとに」と訳したのは、【1①】で指摘したような、fürに人称代名詞が続く場合の意味を明確にしたものである。寺沢訳の「〔顕在的に〕」というのは、意味不明である。

【1④】

この文の末尾にある“und hat damit nur diß Daseyn, für eines zu seyn.”以前は、これまでの成り行きから了解可能であろう。「〈他のもの〉は、〈それだけで独立した存在〉の内にしかなく」、その「外」にはない、のである。

ここで掲げた末尾の文の主語は、“es”すなわち“Das Andre”であって、「〈他のもの〉が〈それだけで独立した存在〉の内に」ある場合をいう。とはいえ、この〈他のもの〉は、〈それだけで独立した存在〉が「みずから自身と無限に関係すること」の一こまであるから、ここから離れて別の他のものではなく、それと「〈一つのもの〉として存在する」以外のなにものでもない。これが、“für eines zu seyn”という“Daseyn”だとされる。

もちろん、この場合の「現存在」(Daseyn)は、この文冒頭でいわれるように、Fürsichseyn以前の「現存在」章で取り上げられるがごときものではない、としなければならない。しかしながら、Fürsichseynの「内で」das Andreが廃棄されたものとしてある、ということで、Fürsichseynが成り立つのであるから、このdas Andreを廃棄して「〈一つのもの〉として存在する」ことは現存在しなければならない。こうした「〈一つのもの〉として存在するという現存在」をdas Andreがもつとされるのは、das Andreが廃棄されることで「〈一つのもの〉として存在する」ということが現存在するからであり、das Andre抜きにはこのことがありえないからである。

このさい、das Andreは、Daseynで規定態をもたらすようなそれ自身なんらかの規定態を伴うDaseynなのではない。Fürsichseynにおいて、Daseynたるdas Andreは廃棄しつくされているわけだから、das Andreは、無限なものなのである。ヘーゲルは、「C.)観念態」において、〈他のもの〉に言及し、「無限であるものは、アイデアル(ideell)である。無限であるものは、〈他のもの〉がただ無限であるものとして(für es [sc. was unendlich ist])のみあるかぎり、このかぎりでのみ制限を欠いている。」(95:15 ff.)とする。

なお、“Etwas”を「或るもの」ではなく、「〈なにものか〉」と訳していることについては、節を改めて議論する。

ようやく、寺沢による「向一存在」の説明を検討できる段となった。

寺沢は、「向自存在は他者を自己の外にもたない。」とし、「他者は揚棄された他者として・契機として向自存在のうちに取りこまれており、もはやいかなる独立性をも持っていない。」とする⁴⁰。この点は、用語法を除きおおむね妥当であろうが、このさいの「他者」が「揚棄された他者」として契機として残り、奪われたのはその「独立性」のみで従属的には定在として蠢いているかのように理解される余地があり、おおいに不満が残るところである。

そのうえで、寺沢は、「このような向自存在の契機となっている・揚棄された他者に向かってある存在、それが『向一存在』なのである。」とする。このような理解がもたらされる事情は「はじめに」で紹介したからこの場では繰り返さないが、廃棄されたdas Andreへの関係がFürsichseynみずからの関係であることをもって、「揚棄された他者に向かってある存在」が「向一存在」だとするのは、まったくもって不当であろう。ヘーゲルは、ただ、「〈他のもの〉は、もっぱら、〈一つのもの〉として存在する現存在だけを持つ」と言っているにすぎないのであって、für

40 寺沢訳、前掲書、558頁。

einesの“eines”を“Anderes”としてはいないのである。「揚棄された他者に向かってある存在」は、寺沢の奇妙な推論の賜物でしかない。

【2①】

“Diß zweyte Moment des Fürsichseyns,”の“Diß”は、前文の“für eines zu seyn”を指示するとも考えうるが、「ここで話題となっている」という趣旨で理解するのもよいであろう。いずれにせよ、「第二のモメント」は、“Für eines seyn”である。

wie 副文、すなわち、“wie das Endliche in seiner Einheit mit dem Unendlichen ist.”は、「有限なものが無限なもののみずから統一するさいのあり方」と訳しうる。寺沢は、esがwie副文を予示するかたちで解釈しているが、それは次に述べるように疑問である。

“Diß zweyte Moment des Fürsichseyns,”がコンマで区切られているところに注意する。この表現は、habend, seiendなどを省略した縮小分詞とみるべきだろう。これにしたがえば、“es”が文の主語であるから、この分詞の意味は、この“es”が“Moment”を「持つ」か、そのもので「ある」か、ということになる。

habendが省略されているとみれば、“Moment”が“des Fürsichseyns”を従えている——属格は所有の意味である——関係から、“es”の指示先を“Fürsichseyn”とみることができよう。seiendが省略されているとみれば、“Moment”が上述のように“Für eines seyn”である事情から、“es”の指示先を同様にとらえることができよう。もっとも、前文では“diß Daseyn, für eines zu seyn”とあるから、“es”の指示先を“diß Daseyn”とすることも可能かもしれない。しかし、前文の趣旨からすると、ここで問題となる〈他のもの〉は、一般の現存在ではなく、現存在があるとすれば、「〈一つのもの〉として存在する」といった現存在だ、ということであるから、こうした現存在は認容的に持ち出されたものにすぎない。それゆえ、“es”の指示先を“diß Daseyn”とするわけにはいかないであろう。

wie 副文は、“es”が表現する内容を示している。すなわち「有限なものが無限なもののみずから統一するあり方」である。すると、逆に、こうした内容を表現するものとして、“Fürsichseyn”が適切なのか、“für eines zu seyn”が適切なのか、という判断が必要となる。wie 副文で語られる「統一」(Einheit)に照らして考えると、後者に軍配を上げざるをえないだろう。そして、ここから遡行すれば、縮小分詞は、seiendの省略とみて、“es”の指示先を“für eines zu seyn”と考えるのが妥当だということになる。

なお、寺沢は、ここで検討したコンマの存在を無視して訳しているといわざるをえない。そのことによって、“es”の指示内容を誤認することになり、ひいては、「統一」を表現するのが「〈一つのもの〉として存在する」ことであるのを不明にしている。もっとも、寺沢にしたがって、「向一的にある」ことが有限と無限の「統一」を表現する、などと訳してみたとしても、明解さは得られないと思われる。

【2②】

ここでは、“Daseyn”章で“für eines seyn”が取り扱われる可能性を指摘しながら、そこでは“für eines seyn”が問題にならないことを指摘している。

なにゆえこうした言及が必要であるかといえば、【1④】で、「〈一つのもの〉として存在するという現存在」を提示したためである。

しかし、こうした「現存在」は、そこにおいても、「現存在」章での意味は持たなかった。だから、「〈一つのもの〉として存在する側面というみずからの限界に無関心である。」とするのである。

ここでは、とくに、“für eines seyn”と同様に、“das Seyn-für-Anderes”を「〈他のものとしての存在〉」と訳していることに注意を払いたい。この点は、ドイツ語の言葉のなりたちが同様であるところから、同様に訳すべきである、と考えたところである。しかし、このことは別儀だ、という考え方もあるであろう。このことは、節を改めて考えることにする。

6 「観念態」における für eines seyn

ヘーゲルは、『論理学』初版において、“b.) für eines seyn”の項に引き続き、“c.) Idealität”の項を起し、Fürsichseynの第3のモメントとしてそれを論ずる。AnsichseynとしてのFürsichseynと、für eines seynの二つのモメントが一体になったものが、Idealitätである。すなわち、「〈それだけで独立した存在〉は、区別された二つのモメントをみずからの内に具えている。」

(95:02)とされるが、この「二つのモメント」とは、AnsichseynとしてのFürsichseynと、für eines seynとである。そして、この「二つのモメントは、分離することができない。」(95:07 f.)とされる。「みずからへの無限な関係は、ただ否定の否定としてのみあり、また、〈他であること〉をこのように廃棄することは、直接的に、みずからに關係する統一なのである。」(95:08 ff.)このうち、「みずからへの無限な関係」は、AnsichseynとしてのFürsichseynであり、「〈他であること〉を廃棄して「みずからに關係する統一」となることは、für eines seynである。

こうして、「観念態」の端的な規定は、次のようになる。「〈それだけで独立した存在〉は、みずからの内で〈他のもの〉がただ廃棄されたものでしかないことによってみずからに關係するという規定のかたちをとるので、こうした〈それだけで独立した存在〉は、観念態である。」(95:12 ff.)ここで、「みずからに關係する」は、AnsichseynとしてのFürsichseynであり、「〈他のもの〉がただ廃棄されたものでしかない」は、für eines seynである。これは、寺沢が言うような「揚棄された他者に向かってある存在」なのではなく、「〈一つのもの〉として存在する」ことが「他者」の「揚棄」なるもので成り立っている、ということにほかならない。

もっとも、ヘーゲルは、AnsichseynとしてのFürsichseynと、für eines seynとの区別を、見かけの問題として位置づける。すなわち、「現存在」章での“Ansichseyn”と“Seyn-für-Anderes”との区別とパラレルに、Fürsichseynの“Ansichseyn”の感性では「みずからへの無限な関係」、 “Seyn-für-Anderes”の感性では「〈一つのものとしての存在〉 Seyn-für-eines」と区別されているような見かけがある。このような見かけとしては、“Seyn-für-Anderes”すなわち「向自存在」の「向他存在」なるものが「向一存在」であると理解される側面があるわけである。寺沢の誤解の起こるゆえんである。しかしながら、「観念態」の項におけるヘーゲルの所論の眼目は、こうした区別が成り立たず、区別項のそれぞれが「真なる規定態」になっていないことにある。すなわち、「こうした区別にしがみつくながら、現存在やくなにかが、なおも表象に残ってしまう」(98:01 ff.)という不都合があり、こうした現存在を想定するがごときことは「観念態」においてはふさわしくないであろう、「〈一つのものとしての存在〉と〈それだけで独立した存在〉とは、たがいに真なる規定態をなしていない」(98:08 ff.)わけである。

しかしながら、〈それだけで独立した存在〉は現存在ではなく、「〈存在するもの〉ではない」わけだが、こうした「非存在」(Nichtseyn)を廃棄するものであり、「一つのものとして存在する」(Für-eines-seyn)のであり(98:22 ff.)、したがって、「アイデアルなものは、必然的に〈一つのものとして〉ある。」(98:25 f.)のである。こうして、AnsichseynとしてのFürsichseynから、Für-eines-seynへの移行⁴がIdealitätの理解を通じて果たされることになり、“A. Fürsichseyn als solches”節の第3項“Werden des Eins”(「〈一つ〉が〈なること〉」)を準備するこ

とになる。「〈一つ〉が〈なること〉」とは、端的にいえば、Fürsichseynの規定として、“die Beziehung-auf-sich-selbst des Aufhebens”（「廃棄することくみずから自身に関係する」）という“Eine Bestimmug”（「〈一つの〉規定」）のみが現前することになり（99：13 f.）、「〈それだけで独立した存在〉は、みずからと単純に〈一つであること〉（Einsseyn）であり、限界や規定態を持たなくみずからの内にあること」である。」（99：17 f.）ことになることである。

こうしたFürsichseynのEinsseynへの移行は、Für-eines-seynがそもそもeinesと「同一視」され、「同等・代理」となるものを意味することで一貫して理解することが可能である。このさい、“für ... seyn”を「向かう存在」と理解するなら、Fürsichseynは、Einsseynに移行途上のものとして、「一つのもの」とは離れて存在する他のものとししか考えられなくなるだろう。ここから誤解に向かう列車は出発する。寺沢は、für eines seynを「揚棄された他者に向かつてある存在」と理解し——「揚棄された」と形容がつくとはいえ——「他者」に向けて逆進する。武市は、この「向一有」を「向自有の中における向他有の契機」と理解し、「それ自身『一者に向かつて』ある『一者として』あることによって、第一の一者そのものをも『一者として』のものであることを自覚せしめる契機」として「向一有」を理解するわけだが⁴²、それ自身が「一者として」あることはいいとしても、こうした理解では、「第一」ならざる第二の青い鳥なる「一者」を求めて彷徨うことになるだろう。

7（付論一）〈他のものとしての存在〉 Seyn für Anderes

本論考では、さきに本文【2②】で、Seyn für Anderesを〈他のものとしての存在〉と訳した。そのさいのコメントでも述べたように、“für eines seyn”の“für”が「同一視」、「同等・代理」であるならば、“Seyn für Anderes”の“für”も同様に訳すべきであろう、ということである。

これは、従来、「向他存在」「向他有」、あるいはこのうち「向」を「対」に変えるかたちで訳されているもので、「他に向かう存在」、「他に対する存在」という理解で特段問題がないようにもみえる。むしろ、Seyn für Anderesを〈他のものとしての存在〉と捉えることのほうが、違和感を惹き起こすのではないか。しかし、すでに論じたように、fürを“Was für einer?”の“für”と同一の意味としてとらえるべきならば、同様の理解がSeyn für Anderesにも当てはまるのではないかと反省してみてもよいはずである。

ヘーゲルは、「現存在」章「現存在そのもの」節の「実在態」項で“b.) Seyn-für-Anderes und Ansichseyn.”の目を立て、Seyn für Anderesを「現存在」の一モメントとして議論する。このSeyn für Anderesの概念を導くのは、前の目である“a.) Andersseyn”である。訳の妥当性をみるためには、ある程度の文脈を追わなければならないと思われるが、紙数のことも考え、要点となる段落のみを寺沢訳と対照する。書式は、先ほどと同様である。

本論考訳	寺沢訳
49：01 a) Andersseyn.	
a) 〈他であること〉	(a) 他在
【1①】 49：02 Das Daseyn ist daher <i>erstens</i> jene Einheit nicht	

41 寺沢は、こうした移行を認めない。たとえば、寺沢訳、前掲書、563頁。

42 武市訳、前掲箇所。

49 : 03 nur als Seyn, sondern so wesentlich als Nichtseyen.	
したがって、現存在は、第一に、そのような〔存在と無との直接的な〕統一であるが、〈存在する〉という統一であるだけでなく、むしろそれと同じくらい本質的に、〈存在しない〉という統一でもある。	したがって定在は第一に、存在としてだけかの〔存在と無との〕統一であるのではなく、本質的に非存在としてもそうである。
【1②】 49 : 04 Oder jene Einheit ist nicht nur seyendes Daseyn, sondern 49 : 05 auch nichtseyendes Daseyn ; <i>Nichtdaseyn</i> .	
いいかえれば、そのような統一は、存在する現存在であるだけでなく、むしろ存在しない現存在でもある。つまり、そのような統一は、〈現存在しない〉。	換言すれば、かの統一は存在的な定在であるだけでなく、非存在的な定在・すなわち非定在でもある。
【3①】（【2】略） 49 : 14 <i>Zweytens</i> , das Nichtdaseyn ist nicht reines 49 : 15 Nichts ; denn es ist ein Nichts <i>als des Daseyns</i> .	
第二に、〈現存在しない〉とは、純粋な無ではない。というのも、〈現存在しない〉とは、現存在が無いという無だからである。	第二に、非定在は純粋無ではない。というのは、それは定在の無としての無であるから。
【3②】 49 : 16 Und diese Verneinung ist aus dem Daseyn selbst genom- 49 : 17 men ; aber in diesem ist sie vereinigt mit dem Seyn.	
そして、このように否認することは、現存在自身から取り出されているのだが、〈現存在しないこと〉では、このように否認することが存在と一つにまとめられている。	そしてこの打消しは定在そのものに由来するのである。だが定在においてはこの打消しは存在と合一されている。
【3③】 49 : 18 Das Nichtdaseyn ist daher selbst ein Seyn ; es ist 49 : 19 <i>seyendes Nichtdaseyn</i> .	
したがって、〈現存在しない〉とは、それ自身、存在である。つまり、〈現存在しない〉とは、存在する〈現存在しないこと〉である。	だから非定在はそれ自身が存在である。それは存在的な非定在である。
【3④】 49 : 19 Ein seyendes Nichtda- 49 : 20 seyn aber ist selbst Daseyn.	
だが、存在する〈現存在しないこと〉は、それ自身、現存在である。	そして存在的な非定在はそれ自身が定在である。
【3⑤】 49 : 20 Diß <i>zweyte Daseyn</i> ist 49 : 21 jedoch zugleich nicht Daseyn auf dieselbe Weise, wie als 49 : 22 zuerst ; denn es ist eben so sehr Nichtdaseyn ; Daseyn als 49 : 23 Nichtdaseyn ; Daseyn als das Nichts seiner selbst, so	

49 : 24 daß diß Nichts seiner selbst gleichfalls Daseyn ist.	
もつとも、同時に、この第二の現存在は、第一の場合と同じあり方の現存在ではない。というのも、第二の現存在は、同程度に〈現存在しないこと〉だからであり、〈現存在しないこと〉である現存在だからである。いいかえれば、第二の現存在は、現存在自身が無いことという現存在だからである。そのため、現存在自身がこのように無いことも、同様に現存在なのである。	けれどもそれと同時にこの第二の定在は、はじめの場合と同じ仕方定在であるのではない。というのは、それは〔定在であるが〕また同じく非定在であるのだから。つまり、非定在としての定在であり、それ自身の無としての定在である〔わけだ〕が、その結果このそれ自身の無がこれまた定在である――。
【3⑥】 49 : 24 — 49 : 25 Oder das Daseyn ist wesentlich <i>Andersseyn</i> .	
―別のいい方をすれば、現存在は、本質的に、〈他であること〉である。	換言すれば、定在は本質的に他在である。
【9①】（【4】～【8】略） 51 : 11 <i>Drittens</i> : Das Daseyn selbst ist wesentlich An- 51 : 12 <i>dersseyn</i> ; es ist darein übergegangen.	
第三に、現存在自身は、本質的に、〈他であること〉であり、〈他であること〉へと移行してしまった。	第三に、定在そのものは本質的に他在であり、それは他在へと移行してしまっている。
【9②】 51 : 12 Das Andere ist 51 : 13 so unmittelbar, nicht Beziehung auf ein <i>ausser ihm</i> 51 : 14 <i>Befindliches</i> , sondern Anderes anundfürsich.	
この〈他のもの〉は、こうなった直接的なところでは、みずからの外に見出されたものとの関係ではなく、それ自体でもそれだけで独立しても〈他のもの〉である。	他者はこうして直接的であり、その外にみいだされるものへの関係ではなくて、他者それ自体である。
【9③】 51 : 14 Aber so 51 : 15 ist es das <i>Andre seiner selbst</i> .	
だが、この〈他のもの〉は、それゆえに〈他のもの〉自身にとっての〈他のもの〉である。	だがこうして、他者はそれ自身の他者である〔ということになる〕。
【9④】 51 : 15 — Als das Andre 51 : 16 seiner selbst ist es auch Daseyn überhaupt oder unmittel- 51 : 17 bar.	
―この〈他のもの〉は、〈他のもの〉自身にとっての〈他のもの〉なのだから、一般的に直接的に、現存在でもある。	―他者は、それ自身の他者として定在一般でもある、あるいは直接的である。
【9⑤】 51 : 17 Das Daseyn verschwindet also nicht in seinem	

<p>51 : 18 Nichtdaseyn, in seinem Andern ; denn diß ist das Andre 51 : 19 seiner selbst ; und das Nichtdaseyn ist selbst Daseyn.</p>	
<p>このように、現存在は、みずからが〈現存在しない〉というかたちでも、つまりみずからの〈他のもの〉というかたちでも、消失しない。というのも、現存在は、みずから自身にとっての〈他のもの〉であるし、それが〈現存在しないこと〉は、それ自身、現存在だからである。</p>	<p>したがって定在はその非定在・その他者において消失するのではない。というのは、定在の他者とは〔他者〕それ自身の他者であるから。こうして非定在はそれ自身が定在である。</p>
<p>【10①】 51 : 20 Das Daseyn <i>erhält</i> sich in seinem Nichtdaseyn ; 51 : 21 es ist wesentlich eins mit ihm, und wesentlich nicht eins 51 : 22 mit ihm.</p>	
<p>現存在は、みずからが〈現存在しない〉というかたちでみずからを維持している。現存在は、〈現存在しないこと〉と本質的に一つであり、また、〈現存在しないこと〉と本質的に一つでない。</p>	<p>定在はその非定在のなかで自己を維持している。定在は本質的に非定在と一つであり、また本質的にそれと一つでない。</p>
<p>【10②】 51 : 22 Das Daseyn steht also <i>in Beziehung</i> auf 51 : 23 sein Andersseyn ; es ist nicht rein sein Andersseyn ; das 51 : 24 Andersseyn ist zugleich wesentlich in ihm enthalten, und 51 : 25 zugleich noch davon <i>getrennt</i> ; es ist <i>Seyn-für-</i> 51 : 26 <i>Anderes</i>.</p>	
<p>したがって、現存在は、みずからの〈他であること〉と関係する。現存在は、純粹に、みずからの〈他であること〉なのではない。〈他であること〉は、同時に本質的に、現存在に含まれているし、また同時にやはり、現存在と分けられている。現存在は、〈他のものとしての存在〉である。</p>	<p>したがって定在は、その他在へと関係している。定在は純粹にその他在であるのではない。他在は同時に本質的に定在のなかに含まれており、また同時に定在から分かれてもいる。〔かくして〕他在は向他存在である。</p>

訳文をめぐりコメントをするなかで、“Seyn-für-Anderes”の“für”が「同一視」、「同等・代埋」の意味を担うことを論証する。

【1①】
fürを「として」と訳すとなると、通例このように訳すことの多いalsをどう処置するか、訳語の跨りを気にしないのか、あるいはなるべく訳し分けをするのか、という判断に迫られる。いちおう、alsを「として」と訳さないで済ましうるなら、そのように処置する態度で臨む。

なお、Daseynを「現存在」とする件については、のちにEtwasを論ずるさいに言及する。

【1②】
現在分詞であるseyendes, nichtseyendesを、寺沢のように「存在的な」、「非存在的な」と訳すのは、拙劣である。

末尾、セミコロンを置いてNichtdaseynとされるのは、ヘーゲルがよく用いる語法で、セミコロン以前を総括する表現である。

【3①】
als des Daseynsの属格は、寺沢の判断通り、Nichtsの省略とみてよいだろう。すなわち、als

Nichts des Daseyns である。Nichts は、不定代名詞 nichts の名詞化であるから、属格など他語を従えている場合はとくに、「無い」といったかたちで訳して差し支えないと思う。ちなみに、グリムの辞書は、Nichts の名詞化に関し珍しくヘーゲルの参照もして、「II. 16世紀以降、根源的にすでに名詞化する自然がある nichts は、語形変化しない名詞として冠詞を冠して用いられる」とし、“1) als gegenheil des seins, als verneinung von etwas (ichts), das nichtsein” としている⁴³。

【3②】

nehmen aus については、グリムの辞書、“NEHMEN” に“3) nehmen aus, herausnehmen, wählen aus” とあることに留意する⁴⁴。ようするに、Verneinung は、もともと Daseyn に含まれているわけだが、Daseyn というだけでは、Verneinung がかならずしも見通せない。この Verneinung としての Nichts を取り出したかたちがあって、これが Nichtdaseyn なのである。「否認することが存在と一つにまとめられている」というのは、この語形のことである。「否認すること」は Nicht に相当し、「存在」は daseyn に相当する。ここから文脈的に考えると、in diesem の diesem の指示対象は、Nichtdaseyn でなければならない。この点、寺沢訳は、誤訳と思われる。

なお、語形が daseyn であるにもかかわらず、「存在」(Seyn) と「一つにまとめられている」という点は、考えてみる余地があるかもしれない。ただ、この間、Daseyn に含まれる Nichts を議論してきた関係で、これに対応するのは Seyn である、という理解は、ありうると思う。

【3⑥】

Andersseyn の訳語は、定訳の「他在」に難点があると思う。「在」に他の漢字をかぶせた熟語は、たいていは「存在」を強く表現する。たとえば、通常の表現で、「实在」は、「実際に存在すること。現実にあるもの。」(『大辞泉』第2版)を意味し、「潜在」は、「表面には表れず内にひそんで存在すること。」(同)といった調子である。これに対し、Andersseyn は、もちろん「存在」しなければならないのだが、たとえば、“Die Sache ist anders.” が「事態はそれと違う、実際はそうではない」(『独和大辞典』第2版)と訳されるように、「違うこと」、「そうではないこと」を前景に出す表現であって、「存在」は背景に退いているべきだと思われる。グリムの辞書は、“ANDERS” の第一義を“auf andre weise” とする⁴⁵。anders は、「他のあり方」であって、なお「他のもの」とまではいかない。そこで、〈他で (anders) あること (seyn)〉と訳すべきだと主張する⁴⁶。

【9②】

“so unmittelbar” の位置づけが問題であろう。寺沢はこれを補語と捉えるのだが、前文【9①】の“es ist darein übergegangen” という完了を受けて、そのさいの直接的なあり方を次の“nicht ... sondern ...” のかたちで表現しているのではないか。

“ein ausser ihm Befindliches” の“ihm” は、“das Andere” を指示しているとみてよいだろう。すなわち、〈他のもの〉が〈他のもの〉であるのは、〈他のもの〉の「外にみいだされたもの」が対照される自体となって、これとの関係で〈他のもの〉とされるのではない、ということである。

43 Vgl. *Grimm.*, Bd. 13, Sp. 723.

44 Vgl. *Grimm.*, Bd. 13, Sp. 535.

45 Vgl. *Grimm.*, Bd. 1, Sp. 312.

46 大石雄爾は、「他のものであること」の意味だとする。大石雄爾『ヘーゲル論理学の真相——「普通理解力」で読むヘーゲル論理学の有論——』、2005年、白桃書房、45頁参照。

このため、“sondern”以下の「それ自体でもそれだけで独立しても〈他のもの〉」という議論になる。では、〈他のもの〉と叫ぶための対照される自体は、なんなのか？ これは、〈他のもの〉の外でありえないいじょうは、〈他のもの〉の内に求めなければならない。この言い直しが、【9③】となる。

なお、anundfürsichは、an unf für sichの結合形だが、これには、グリムの“FÜR”の項において、“an und für sich, ganz auf sich beschränkt ohne jedes andere, von jedem andern gegenstand abgesondert”（「いかなる他のものも抜きにみずからにまったく制限され、いかなる他の対象からも切り離されている」）とされている。したがって、これが「絶対的」とも訳されうるゆえんであるが、この訳語はabsolutの専売特許とすることとして、“an sich”を——「即自」ではなく——「それ自体」、「für sich」を——「対自」ではなく——「それだけで独立して」と訳しうることに鑑み、これらを併合して「それ自体でもそれだけで独立しても」と訳すのは、グリムの積義にかなったことではないかと思われる。

【9③】

この〈他のもの〉は、その外に対照される自体を求めることができないため、みずからが自体となって、「〈他のもの〉自身にとっての〈他のもの〉」とならざるをえない。ここで、“das Andere seiner selbst”の“seiner”の属格を「にとつての」と訳したが、“seiner”側が「他のもの」であるとの「判断や評価の基準」（『大辞泉』）と考え、それを主体としていることを明示するためである。

【9④】

〈他のもの〉は、「〈他であること〉へと移行してしまった」直接態としてあるものである。〈他であること〉は、「現存在自身が無いことという現存在」であった（〈第二の現存在〉、【3⑤】）。したがって、〈他のもの〉は、「現存在自身が無いことという現存在」へと移行してしまった直接態である。しかし、〈第二の現存在〉では、「無い」とされる「現存在」（〈第一の現存在〉）と、これが「無い」ことのほうを現存在とすること（〈第二の現存在〉）とが区別されており、一致していない。しかしながら、この場の〈第三の現存在〉は、みずからと区別される〈他のもの〉を認めない。それゆえ、〈他のもの〉は、「〈他のもの〉（現存在）自身が無いことという〈他のもの〉（現存在）」ということになる。「〈他のもの〉自身が無い」のであるから、〈他のもの〉を否定する自体としての当初の現存在と同様である。したがって、「〈他のもの〉は、[…]一般的に直接的に、現存在でもある。」わけである。

【9⑤】

現存在は、〈現存在しない〉もの、〈他のもの〉でもある。そうであるいじょう、現存在は、いかにしても「消失しない」。ゆえに、

【10①】

現存在は、〈現存在しないこと〉と一つであると同時に一つでない、ということになる。別の言い方をすれば、現存在は、現存在することであると同時に〈現存在しないこと〉である。

【10②】

前文において、〈現存在しないこと〉を〈他であること〉で言い換える（【3⑤⑥】）。そうすると、現存在は、〈他であること〉であると同時にそうでもない。したがって、〈他であること〉は、現存在と「分けられている」。このように、〈他であること〉が現存在から切り離しうるとしても、現存在が〈他であること〉を表現するのが、“Seyn-für-Anderes”の概念である。

したがって、この“für”は、現存在と「同一視」され、その「同等・代理」とされる意味を

担っているといわなければならない。(わざわざ「同一視」され、「同等・代理」とされるのは、当然ながら、für でつながる文肢が「分けられている」からでもある。) それゆえ、この“für”を介して Daseyn は“*Anderes*”に「向かう」のでも「対する」のでもない。むしろ、Daseyn に即してある Nichts, Nichtdaseyn, Andersseyn, *Anderes* を同一・同等のものとして露見させるのである。

8 (付論二)〈なにものか〉Etwas

Etwas は、「現存在」章「現存在そのもの」節の最終項として、見出し語として掲げて論じられる。Etwas は、「或るもの」を定訳としているが、本論考としては〈なにものか〉と訳すことを提唱するものである。

本論考訳	寺沢訳
<p>【2①】 58:05 Das Daseyn zunächst als solches ist nur die <i>un-</i> 58:06 <i>mittelbare</i> Einheit des Seyns und Nichts.</p>	
<p>さしあたり、現存在そのものは、存在と無との直接的な統一にすぎない。</p>	<p>まずはじめに定在そのものは、存在と無との直接的統一にすぎない。</p>
<p>【2②】 58:06 Die 58:07 Realität ist diese Einheit in dem bestimmten Unterschiede 58:08 ihrer Momente, die an ihr verschiedene <i>Seiten</i> aus- 58:09 machen, Reflexionsbestimmungen, die gegen einander 58:10 gleichgültig sind.</p>	
<p>実在態は、存在と無というモメントを明確な区別としながらこの両者を統一するが、そのさい、これらのモメントは、この統一のもとは違った側面をなしている。すなわち、たがいに無関心な〈折れ返りの諸規定〉をなしている。</p>	<p>実在性はその両契機の一定の区別のなかでのこの統一であり、そしてこの両契機は実在性のものでことなつた側面を・すなわち反省諸規定をなしており、これらの側面すなわち反省諸規定は相互に無関心的である。</p>
<p>【2③】 58:10 Aber weil jede nur ist als in Bezie- 58:11 hung auf die andere, und jede die andere in sich schließt, 58:12 so hört die Realität auf, eine solche Einheit zu seyn, in 58:13 welcher beyde gleichgültig bestehen.</p>	
<p>しかし、どちらの側面も他方の側面との関係の内にあるときにだけあり、どちらの側面も他方の側面をみずからに含みこんでいるから、実在態は、両者が無関心に存続するような統一であることをやめている。</p>	<p>けれども、これらの側面のおのおのは他の側面への関係のうちにあるものとしてのみあり、おのおのが他の側面を自分のうちに含んでいるので、実在性は、そのなかで両側面が無関心的に成り立つようなそういった統一であることをやめる。</p>
<p>【2④】 58:13 Es ist eine Einheit, 58:14 welche sie nicht bestehen läßt, ihre <i>aufhebende</i> ein- 58:15 fache Einheit.</p>	

<p>実在態は、これらの側面を存続させておかない統一であり、それらを廃棄する単純な統一である。</p>	<p>〔このようにして成立したもの〕、それは両側面を〔たがいに無関心的に〕なりたたせておかない統一であり、それらを揚棄する単一な統一である。</p>
<p>【2⑤】 58：15 Das Daseyn ist <i>Insichseyn</i>, und als 58：16 <i>Insichseyn</i> ist es Daseyendes oder <i>Etwas</i>.</p>	
<p>この現存在は〈みずからの内にあること〉であり、〈みずからの内にあること〉である現存在は、〈現存在するもの〉、つまり〈なにものか〉である。</p>	<p>定在は自己内存在であり、そして自己内存在としてそれは定在するもの・すなわち或るものである。</p>
<p>【3①】 58：17 Das <i>Insichseyn</i> des Daseyns ist somit die einfache 58：18 Beziehung desselben auf sich selbst, wie das <i>Ansichseyn</i>.</p>	
<p>したがって、現存在が〈みずからの内にあること〉は、〈それ自体の存在〉と同様に、現存在がみずから自身と単純に関係することである。</p>	<p>それゆえに定在の自己内存在は、即自存在と同様に、定在の自己自身への単一な関係である。</p>
<p>【3④】(②③略) 58：27 —Das <i>Insichseyn</i> 58：28 hingegen ist nunmehr das eigene <i>Ansichseyn</i> des Daseyns ; 58：29 es ist <i>seine Reflexion in sich</i>.</p>	
<p>——これに反して⁴⁷、〈みずからの内にあること〉は、いまや、現存在の独自の〈それ自体の存在〉であり、現存在のみずからの内への折れ返りである。</p>	<p>——これに反して自己内存在はいまや定在の固有の即自存在であり、定在の自己内反省である。</p>
<p>【3⑥】(⑤略) 58：33 Das <i>Insich-</i> 59：01 <i>seyn</i> dagegen ist die Beziehung des Daseyns auf sich, in- 59：02 sofern das Aufheben des Seyns-für-Anderes sein eige- 59：03 nes ist ; das Seyn-für-Anderes geht an ihm selbst in 59：04 das <i>Ansichseyn</i> über, und dieses ist dadurch nicht mehr 59：05 unmittelbares <i>Ansichseyn</i>, sondern das sich gleichfalls mit 59：06 seinem andern Momente vereint hat, und in dem das 59：07 Seyn-für-Anderes aufgehoben ist, oder <i>Insichseyn</i>.</p>	
<p>これに反して⁴⁸、〈みずからの内にあること〉は、〈他のものとしての存在〉の廃棄が現存在独自のことであるかぎり、現存在がみずからに関係することである。〈他のものとしての存在〉は、現存在自身のもので〈それ自体の存在〉へと移行する。そして、〈それ自体の存在〉は、この移行によってもはや直接的な〈それ自体の存在〉ではなく、同様に現存在の他のモメントと一体化してし</p>	<p>これに反して自己内存在は、向他存在を揚棄する運動が定在自身の運動である限りでの・定在の自己への関係である。向他存在はそれ自身のもので即自存在へと移行し、そして即自存在はこのことによってもはや直接的な即自存在ではなく、自己をその他方の契機と同じように統合してしまっている即自存在であり、また、そのなかで向他存在が揚棄されている即自存在である。換言すれば、</p>

47 「これに反して」とは、この場で略した前文②③の「〈それ自体の存在〉」に「反して」の趣旨。

48 「これに反して」とは、この場で略した前文⑤の「外面的な振り返り」に「反して」の趣旨。

<p>まい、〈他のものとしての存在〉を廃棄している〈それ自体の存在〉である。これがすなわち〈みずからの内にあること〉である。</p>	<p>〔それは〕自己内存在である。</p>
<p>【4①】 59:08 <i>Etwas bestimmt sich fernerhin näher als Fürsich-</i> 59:09 <i>seyn, oder Ding, Substanz, Subject u. s. f.</i></p>	
<p>〈なにものか〉は、今後はより詳細に、〈それだけで独立した存在〉、あるいは、〈ものごと〉、実体、主観などとして規定される。</p>	<p>或るものは、さらによりくわしく向自存在・または物・実体・主観等々として規定される。</p>
<p>【4②】 59:09 <i>Allen</i> 59:10 <i>diesen Bestimmungen liegt die negative Einheit zu Grun-</i> 59:11 <i>de; die Beziehung auf sich durch Negation des Anders-</i> 59:12 <i>seyns.</i></p>	
<p>これらすべての規定の根底にあるのは、否定的な統一であり、いいかえれば、〈他であること〉の否定によってみずからと関係することである。</p>	<p>しかしこれらの諸規定にとっては否定的統一がその根底に存している。〔それらは〕存在の否定を通じての自己への関係〔である〕。</p>
<p>【4③】 59:12 <i>Etwas ist diese negative Einheit des Insichseyns</i> 59:13 <i>nur erst ganz unbestimmt.</i></p>	
<p>〈なにものか〉は、〈みずからの内にあること〉というこうした否定的な統一であるが、最初はまったく無規定でしかない。</p>	<p>或るものは自己内存在というこの否定的統一であるが、やっとはじめてそうなのであってまだまったく規定されていない。</p>
<p>【5①】 59:14 <i>Das Daseyn geht in Daseyendes innerhalb seiner</i> 59:15 <i>selbst über, dadurch daß es als Aufheben des Seyns-</i> 59:16 <i>für-Anderes diesen Punkt der negativen Einheit gewinnt.</i></p>	
<p>現存在は、現存在自身の内部で、〈現存在するもの〉へと移行するが、そうなるのは、現存在が、〈他のものとしての存在〉を廃棄するときに、否定的な統一というこの〈点〉を勝ち取ることによるからである。</p>	<p>定在は、向他存在を揚棄する運動としてそれが否定的統一というこの点を獲得することによって、それ自身の内部で定在するものへと移行する。</p>
<p>【5②】 59:17 <i>Das Daseyn ist also als Etwas nicht die unmittel-</i> 59:18 <i>bare, seyende Einheit des Seyns und Nichts; son-</i> 59:19 <i>dern als Insichseyn hat es Beziehung auf sich, insofern</i> 59:20 <i>es Negation ist.</i></p>	
<p>したがって、現存在は、〈なにものか〉であるとき、存在と無との《存在する直接的な統一》であるのではない。むしろ、現存在は、〈みずからの内にあること〉であるのだから、みずからが否定である場合にみずからとの関係を持つのである。</p>	<p>したがって定在は、或るものとして、存在と無との直接的な・存在的な統一ではなく、自己内存在が否定であるその限り、定在は自己内存在として自己への関係をもっている。</p>

【5③】	
59 : 20 Das <i>Seyn</i> des Etwas besteht also	
59 : 21 nicht in seiner Unmittelbarkeit, sondern im <i>Nichtseyn</i>	
59 : 22 des Andersseyns, das Daseyn ist also im Etwas inso-	
59 : 23 fern in das Negative übergegangen, daß dieses nunmehr	
59 : 24 zu Grunde liegt.	
それゆえ、〈なにものか〉の存在の [・] 実質は、〈なにものか〉の [・] 直接態にあるのではなく、〈他であること〉が〈あらざること〉(非存在)にある。したがって、いまや否定的なものが根底にあるかぎり、現存在は、〈なにものか〉の内 [・] で否定的なものへと移行してしまった。	したがって或るもの [・] の存在はその直接性にはなく、 [・] 他在の非存在に在するのであり、したがって定在は、否定的なものがいまや根底に存するというその限り [・] で、或るものにおいて否定的なものへと移行してしまっている。
【5④】	
59 : 24 Das Etwas ist Daseyn allein insofern	
59 : 25 es eine <i>Bestimmtheit</i> hat.	
〈なにものか〉は、 [・] 規定態を持つかぎりでのみ、 [・] 現存在である。	或るものは、それが一つの [・] 規定態をもつ限りにおいてのみ、 [・] 定在なのである。

この“Etwas”の項は、“Daseyn als solches”の節の締めくくりにあたり、“Bestimmtheit”の節への橋渡しになっている。このさい、“Insichseyen”である現存在が、〈現存在するもの〉ないし Etwas であるとの定義を明確にしなが(【2⑤】)、Etwas は、最初は「無規定」であること(【4③】)、そして「規定態を持つかぎり」で Daseyn であることを論じ(【5④】)、“Bestimmtheit”に導くのである。

“Insichseyen”は、「実在態」が「存在と無という」(【2②】)区別——「実在態」に即していえば、“Ansichseyen”と“Seyn für Anderes”(53 : 23 ff.)の区別——を「存続させておかない統一」、「それらを廃棄する統一」となったときに(【2④】)、たち現れるものである(【2⑤】)。“Insichseyen”は、特段定義されることもなく、ヘーゲルの『論理学』においてこの箇所ではじめて登場する概念である。したがって、文脈的にその含意をつかみとる作業が必要になるが、とくに定義が必要とみなされないのは、ある意味で常識的な言葉の使い方をしてにすぎないからともいえる。

Insichseyen は、ラテン語の“in se esse”のドイツ語訳であって、エイスラーの『哲学概念辞典』によれば、“das Sein der Substanz”の意味だとされる⁴⁹。この“in se”にかかわっては、スピノザの実体観が想起される。すなわち、“in se”は、スピノザの『エチカ』「第1部 神について」の「定義」「三 実体とは、それ自身のうちにあり [in se est] かつそれ自身によって考えられるもの [per se concipitur]、言いかえればその概念を形成するのに他のものの概念を必要としないもの、と解する。」において用いられ、また、「公理」「一 すべて在るものはそれ自身のうちに [in se] 在るか、それとも他のもののうちに [in alio] 在るかである。」においても用いられる⁵⁰。

49 Rudolf Eisler, *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*, zweite, völlig neu bearbeitete Auflage, Bd. 1, Berlin 1904, S. 515. <http://www.zeno.org/Eisler-1904/K/eisler-1904-001-0515> (2015年2月16日閲覧)

ヘーゲルの当面の箇所がスピノザの議論とどう交差するかについては、この場の主題ではないが、少なくとも、「現存在がみずから自身と単純に関係すること」(【3①】)、「現存在のみずからの内への折れ返り」(【3④】)、「く他のものとしての存在を廃棄しているくそれ自体の存在」(【3⑥】)からすれば、こうした Daseyn が「他のもののうちに」あるのではなく、「それ自身のうちに」あるという Insichseyn すなわち in se esse であると考えうるであろう。そして、Insichseyn ということ、実体も想定しうることは、ヘーゲル自身が「くなにものか」は、今後はより詳細に、「くそれだけで独立した存在」、あるいは、「ものごと」、実体、主観などとして規定される。」(【4①】)としていることから明白である。

“Insichseyn”である“Daseyn”が“Daseyendes”だとされ、さらにこれが“Etwas”と言い換えられるわけだが、この“Daseyendes”ないし“Etwas”は、「無規定でしかない」(【4③】)。しかし、注意しなければならないのは、この「無規定」さは、「存在と無との《存在する直接的な統一》のものではない。ここでは、Daseyn が Insichseyn であるいじょう、「く他のものとしての存在」を廃棄(【3⑥】)するといった「否定」(【5②】)が伴っている。つまり、Etwas は、「く他であること」が「くあらざること」(【5③】)である。だから、先ほどの「無規定」は、こうした「否定」によって規定されることにならざるをえない。したがって、「くなにものか」は、規定態を持つかぎりでのみ、現存在である。」(【5④】)ということになる。

さて、我々は、Etwas の訳語を吟味しているのであるが、Etwas がこうした「無規定」である事態と、「規定態」である事態との双方に関わる概念であることに、注意を払いたいわけである。Etwas は、定訳では「或るもの」とされている。周知のように、「或る」は、連体詞であって、「はっきり名を挙げずに物事をさす語」(『大辞泉』第2版)である。それは、連体詞として名詞を要求し、たとえば、「或るところ」、「或る日」、「或る人」といったかたちで、なんらかの概念を特定せず不定なままに表現するわけである。これは「或るもの」でも同様であって、「もの」の概念をごく一般的に指示するのが「或るもの」である。もちろん、このさいには、「もの」が Ding としての「物」ではないとの使用上の注意をするまでもないのかもしれない。しかしながら、「或る」が係る名詞の「なにか」が「もの」として規定されていることに疑いはなく、その点で、Etwas の求める初発の要件である「無規定」をいささか逸脱している憾みが残る⁵¹。むしろ、Etwas ということ、もともとの不定代名詞の etwas の不定性をそのまま表現するので十分ではないか⁵²、と思われる。「etwas は、具体的に規定されていない1つあるいは複数の事物(広い意味での人間以外のもの：動物、物体、抽象概念など)を非常に一般的に表す。irgend を先置することによって、不特定性を強めることができる。」⁵³とされている。

50 Cf. Spinoza, *Ethica, Ordine Geometrico demonstrata*, in: B. d. S., *Opera posthuma, quorum series post Praefationem exhibetur*, 1677 (Google), p. 1 f. Vgl. Eisler, a. a. O., Bd. 2, S. 454. 訳は、スピノザ『エチカ(倫理学)』畠中尚志訳、岩波文庫、1951年、37、39頁による。

51 etwas は、「事物のみを表わす」とされる。ヘルビヒ、前掲書、253頁参照。したがって、「もの」としても、不都合はないとしうるかもしれない。

52 「不定代名詞は、不確定な、すなわち同一性が確定していない人間および事物を表すのに用いられる。」
「人称代名詞・指示代名詞と不定代名詞との主な相違は、前者が既出の人間および事物を指示するのに対し、後者が既出のものの中から任意的に抽出したものを指示するという点である。」「もう一つの相違は、不定代名詞によって表示される人間ないし事物が不定代名詞の不確定という特殊な特徴のため、先行の文において具体的に言及されていなくてもよいという点である。」前掲書、251頁以下。

53 ヘルビヒ他、前掲書、287頁。

そこで、Etwas は、くなにものか」と訳すべきではないかと思うのである。この場合、「なにも」は、「はっきりしない相手をさす語。だれ。何人（なにびと）。」（『大辞泉』第2版、圏点神山）であって、「か」を付加することによって、不確定の意味が明確になる（『広辞苑』第6版「か」【助詞】①④）。

つまりぬ訳語の詮議に拘泥しているように思われるかもしれないが、案外に、ヘーゲル『論理学』の Daseyn 章を読むときには、Etwas の不定性の明確な自覚が求められるからである。すなわち、Daseyn 章は、“A. Daseyn als solches”, “B. Bestimmtheit”, “C. (Qualitative) Unendlichekeit” と進行するが、A 節は、この Etwas で締められるように、不定性が根本特徴となっており、B 節をまっしてはじめて規定態の展開が生じることである。もっとも、Etwas の項においても、その末尾のところ、「規定的なものへ」の「移行」が語られ、「くなにものか」は、規定態を持つかぎりでのみ、現存在である。」ともされるのであるが（【5④】）、それは、B 節を展開するために内蔵された論理というべきであろう。むしろ、Etwas が現れたときは、まずは「不定者」が想定される必要があるのである。

そして、このことは、Daseyn の訳語にも関係してくる。Daseyn が「定在」と訳されるのは、その da を「定」に、seyn を「在」にあてているとみることができるが、da に「定」があてられるのは、その指示的な意味に応じてのことかもしれない。しかしながら、“Daseyn als solches” で結論となる “Etwas” が「不定者」であるいじょうは、このような由来として da を「定」とするのは、不適切だと思われる。あるいは、da を「定」にあてるのは、“B. Bestimmtheit”, “3. Veränderung”, “c.) Negation” の冒頭で、“Das Daseyn, das bestimmte Seyn, als Einheit seiner Momente, des Ansichseyns und des Seyns-für-Anderes, war oben Realität.” (75 : 02 ff.) とされ、“Realität” が参照されながら “Das Daseyn, das bestimmte Seyn” と同格表現されるため、“Daseyn” の “Da” は “bestimmte” (「被規定」)、その “seyn” (「存在」) は “Seyn” に振り当てればよいとして “Daseyn” を「定在」とするなら、それは文脈を履き違えた訳といわざるをえない。その同格は、あくまで、“c.) Negation” に至ってはじめて語りうるものとしてあるからである。

では、実際のところ、Daseyn はどう訳すべきなのか。Seyn 「存在」と Nichts 「無」との「無」としての統一が Werden 「なること」であり、その「存在」が Daseyn であるから、Daseyn は、「なること」が見極められるような「存在」であり、いわゆる「動かない存在」、「死んだ存在」なのではない。Seyn 「存在」が、「無」をも、したがって「動かない存在」や「死んだ存在」をも直接的に含みうるものであるとすれば、Daseyn は、「動く存在」であり「生きた存在」である。当時一般としても、Daseyn は、現に生きた生活、という意味合いになる⁵⁴。Daseyn の訳語として本論考で暫定的に採用した「現存在」がこうした事情を含意しうるのであれば、「現存在」でよいであろう。しかし、「動かない存在」や「死んだ存在」も、いま現にここにあるものとして「現存在」たりうるのだとすれば、具合の悪い話になってくる。こうした誤解と決別するなら、「動」なり「生」なりの一字を割り込ませていい訳語が考え出せるか、ということだろう。特別に造語しなければ、「生存」というのが、一つ考えうるところである。これは、明確に、「静」や「死」と決別している。ただこの語は、生死の判定という特定の文脈で使われるもので、なじみづらいかもしい。だとすれば、「現」にも顔を立てつつ、たとえば「現生」、「現生存」、「現生存在」とでもすべきか。「現生存」にすれば、それはまったくの造語だが、「現生」は、昔からある言葉で「生存」を意味しうるから、これで十分なのかもしれない。

54 Vgl. Grimm., Bd. 2, Sp. 806.

9 おわりに

ヘーゲルの『論理学』初版における“Für eines seyn”の意味を明確にすべく、その原語レベルでの正確な理解、とりわけ für の理解に回帰した。この für が「同一視」、「同等・代理」の意味で読まれなければならないいじょう、その訳は「として」とするのが妥当であり、「向」や「対」と訳すべきではないことになる。したがって、ヘーゲル訳語ジャーゴンとしての「向一存在」なるものは、その含意のものとしては、ヘーゲル『論理学』にまったく存在しないのである。“Für eines seyn”は、「〈一つのもの〉としての存在」である。

こうした理解は、“Seyn für Anderes”の理解の再検討にまで波及せざるをえないだろう。これは、同様にして、「他のものとしての存在」と理解すべきものであり、「向他存在」「對他存在」といった訳では意を尽くさない。というよりは、そうした訳を選択することがヘーゲル『論理学』の平明な理解に大きな障碍となっているのではないか。

もちろん、「向」や「対」という訳で長らく「理解」されてきた事情に鑑みれば、そうすることによりヘーゲル『論理学』についてのなにかしらの理解がついているのかもしれない。しかしながら、そこに難解さの苦悶が認められるとすれば、いわゆる「術語」なるものの再検討も必要なのではないかと思われる。でなければ、不当な「術語」が文脈全体をいっそう混沌とさせ続けることにより、ヘーゲルの論理を意味不明の「神秘」として維持しかねないであろう。だが、ヘーゲルの論理を「神秘」に追いやる意図でもなければ、もはやその道は選べないと考える。